

平成 27 年 1 月 30 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

株式会社ダン計画研究所

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

上町台地のエリアブランド

～地域のまちづくり活動の成果とエリアブランディング活動についての提言～

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	現況調査、ワーキング開催、シンポジウム開催に向けた企画・調整
8月	8/19 上町台地の新しいエリアブランド研究第1回ワーキング開催
9月	現況調査、エリアブランドの観点からの研究
10月	10/2 第2回ワーキング開催
11月	11/5 第3回ワーキング開催
12月	12/2 上町台地フォーラム2014 ～医療・健康をキーワードとする居住まちづくり戦略～ 開催

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	<p>＊地域に根付く歴史伝統、文教地区、大型病院と特徴のある病院の集積、住むまちとしての高いブランド力等、上町台地の特徴分析を行うとともに、産学官の多様な人材の参画を得てワーキングやフォーラムを開催したことで、上町台地において「医療・健康」が新しいエリアブランドとなる可能性とともに、その実現に向けた課題が確認できた。</p> <p>＊フォーラムの開催により、上町台地の新しいエリアブランドの可能性について広く発信することができた。</p>
今後の展望	<p>＊上町台地のエリア・ブランディングの実現に向けて、主要駅周辺・都心部のモデルケースとしての取組、フィールドを共有する健康まちづくりと産業創出、セルフケア関連ビジネスの導入支援等の観点から、地域資源の分析、地域事業者等との連携により、具体的な方策について検討を加えていきたい。</p>

5 事業の総参加人数

80 名（フォーラム参加者数 80 名）

（内訳：地区内から参加.....名・地区外から参加.....名・不明.....名）

その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。

（例：30代から40代が6割程度、など）

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

3 事業の時期と実施内容等 補足資料

●8/19 上町台地の新しいエリアブランド研究 第1回ワーキング開催

日時：平成26年8月19日（火）午前10時～12時

場所：グランフロント大阪（北館7階）ナレッジサロン プロジェクトルームE・F

ゲスト：

大阪市立大学 健康科学イノベーションセンター 副所長 堀 洋氏

大阪市立大学大学院 経済学研究科教授 長尾謙吉氏

【主な意見】

（上町台地の特徴・強み等）

- * 歩く、動けるまちが健康であり、歩けないまちは、健康的ではない。台地の適度な坂も健康にも良い。
- * 上町台地は、「健康で素敵な生活を送れる地域」。文化や、身の回り品のものづくりの場も健康産業として含まれ、知的好奇心を刺激する。
- * まちの機能として、生活が全て組み込まれ、ライフステージ毎（ゆりかごから墓場まで）の要素のミックスを売りにすればよい。
- * 徒歩圏で多様な物を選べるなど、都心メリットを有する地域。そこに歴史的なもの、教育、医療機関も充実しているというイメージが付加されるとブランド力が高まる。
- * 学区、有名私立高校等、教育環境にも優れる。
- * 新しいものはウメキタ、阿部野、森之宮。そうした場所にはない歴史が上町台地にはある。
- * 高所得、多世代が居住する大阪の中では数少ない地域。人口規模、ゆとりや好奇心が強い層が集まっており、新しい健康サービスや商品等のテストマーケティングの適地。



（他地域との関係）

- * 大手前や森之宮と近鉄ハルカス、市大病院といった拠点をつなぐことは可能か。知識を得るところ、消費するところ、医療術を受けるところという整理もできる。（堀氏）
- * コアとなる上町台地の地域の範囲を定め、それを拡大し、広域の上町台地圏として訴求。

（ブランド構築の課題）

- * 健康な暮らしを求める人が居住者や就業者に対して、これから40年後がもっと健康なまちにするために、立地誘導する施設や、今ある資源といかに関係づけていくかが課題。

●10/2 上町台地の新しいエリアブランド研究 第2回ワーキング開催

日時：平成26年10月2日（木）10:00～12:00

場所：ダン計画研究所 7階会議室

ゲスト：

京都大学大学院 工学研究科建築学専攻 教授 高田光雄氏

近鉄百貨店 営業統括部 部長 米田昭子氏

【主な意見】

（上町台地の特徴・強み）

- * 上町台地には、楽器工房も多く、モノづくりを歴史的資源と同じように捉えると面白い。音楽家もたくさんおり音楽をベースにしたまちづくりも動いている。
- * 子育てをする場所として上町台地は最良。子どもを育てながらいろんなネットワークを持っている人は相談する事ができているが、人的交流が少ない人は相談できる場所が少ない悩みを抱える。

（健康に暮らせるまちづくり）

- * 暮らしの中に一定のストレスは必要。縁側のようなヒートショック（屋内外の温度差）を減らす環境が必要だが、バリアフリーもバリアが全くないので無く、適切に作る事が重要。
- * 医療がまちづくりの表に出てくると違和感を覚える。医療、福祉、防災がまちづくりの前面に出てくるとその街は面白くならない。
- * 「薬臭い医療は嫌だ。いつまでも、若くいたい」という思いが50～60歳代にはある。

（ブランド構築の方向性）

- * 百貨店（上本町 yufura、あべのハルカス）でも、人が集まる装置として、地域性に沿った店づくりをしている。文化サロンも好評で、上町台地に適するのは、「面白い町」、「住みたい町」。住んでいる人の心、体の豊かさをどう表現していくかが課題。
- * 全国的に健康医療まちづくりは、ICTの議論、集積の中での病病連携になってしまいがちだが、上町台地では、広義の健康や予防医療を絡めたまちづくりになる。

●11/5 上町台地の新しいエリアブランド研究 第3回ワーキング開催

日時：平成 26 年 11 月 5 日（木）18：00～19：30

場所：ダン計画研究所 7階会議室

ゲスト：

大阪市立大学大学院 生活科学研究科・生活科学部教授 三浦 研氏

NPO 法人まち・すまいづくり 理事長 竹村伍郎氏

【主な意見】

（上町台地の特徴・強み）

- * 大阪城周辺など景観に優れる点もアドバンテージとなりうる。
- * 「高齢者外出介護の会」（空堀）や「認知症の人とみんなのサポートセンター」（玉造）などの NPO 団体が先駆的な活動を行っている。
- * 上町台地での施設系の充実が難しい（地価も高く、採算をとることが困難なため）。

（これからの医療・福祉のまちづくりの方向性）

- * 医療、福祉が在宅へとシフトしていく中で、高齢者自ら暮らしやすい環境を選択していくことが求められる。高齢者住宅等の施設に頼ってしまうと、高齢者は、買い物しなくなる、動かなくなる、頭を使わないといった状態になる。
- * 急性期の病院よりも、かかりつけ医となるクリニック、地域密着の訪問介護サービスの充実が求められる。
- * 日常生活のハブになるような飲食店、惣菜屋などに、声をかけてくれる、健康の話しをしてくれるコミュニケーション機能が加われば良い（イギリスのパブのような）。医療・福祉の世話になる前に、いかに日常生活をゆたかに暮らすかを考えることが必要。上町台地には、ベースとなる飲食店の基盤はあり、とても暮らしやすいエリアになるだろう。
- * マンション管理組合が関与することで、24 時間、管理人が声がけすることも可能で、見守りサービスにも対応できる。集積のメリットを活かすための仕組みを考えることが有効。既存マンションではプライバシー問題で難しいが、新規分譲の場合は成立するかもしれない。
- * 民間サービスを中心とした ICT 活用により、新しい在宅での暮らし方も生まれる可能性がある。
- * 上町台地は大阪に所得のある方に住んでもらうために、洗練され、暮らしやすいまちとしてのイメージづくりの牽引役になってほしい。

上町台地フォーラム 2014

上町台地は、古くより大阪を代表するエリアとして、また優れた居住地として藤原家隆の時代からも知られている。この40年間を見ても、上町台地は歴史地区や文教地区といった性格から、高品位マンションの立地が進む居住地としてのイメージが大きく向上してきた。

次世代のまちづくりの方向として、「医療・健康環境に恵まれた上質な居住地」を提起し、それを実現していくための方策について、地域の人々との協働によるフォーラムを開催し、医療・健康に関連する地域政策の及び新たな上町台地のブランディングを推進するために本フォーラムを開催する。

2014. 12 / 2 (火)

追手門学院大阪城スクエア 大手前ホール

大阪市中央区大手前 1-3-20 (追手門学院大手前中・高等学校本館6階)

13:30 ~ 16:30

[第1部 研究報告]

1) 健康資源からみた上町台地の可能性

宮尾 展子 (株)ダン計画研究所 代表取締役専務

2) ワーキング報告 (フォーラムに先立ち実施した3回のワーキングからの問題提起)

高田 光雄

京都大学 大学院工学研究科 教授・(一財)大阪地域振興調査会 理事
研究テーマは【住居・住環境システムの創造的いち再生】上町台地に関しては長年研究フィールドとして取組み、マイルドHOPEゾーン協議会の顧問、都市住宅学会会長、大阪市住宅審議会会長、大阪府住宅まちづくり審議会会長、他多数の役職を兼務。

長尾 謙吉

大阪市立大学 大学院経済学研究科・経済学部 教授

堀 洋

大阪市立大学 健康科学イノベーションセンター 副所長 / 特命教授

三浦 研

大阪市立大学 大学院生活科学研究科・生活科学部 教授

[第2部 パネルディスカッション]

第1部で議論された視点を基に上記の各パネラー、コメンテーター(大阪市等の自治体、関連企業、専門家、地元関係他) 参加されたメンバーの方等出来る限り多くの方と自由に論議頂きます。

会費 / 無料 (特別資料は別途)

主催 / (一財)大阪地域振興調査会・(株)ダン計画研究所

共催 / 追手門学院大学 後援(予定) / 大阪府・大阪市・大阪商工会議所

問い合わせ先 / (株)ダン計画研究所 担当 山口・吉田

TEL: 06-6944-1173 FAX: 06-6946-9120

E-mail: uemachidaichi@dan-dan.com

HP / http://www.dan-dan.com/dan_topics.html

[参加申込] 必要事項をご記入のうえ、**FAX:06-6946-9120** 宛へ参加申込書をお送りください。

事業所名		E-mail	
所在地	〒	TEL	
		FAX	
参加者	お名前 _____ 部署・役職 _____		
	お名前 _____ 部署・役職 _____		

会社設立40周年記念

上町台地フォーラム 2014 (開催記録)

医療・健康をキーワードとする居住まちづくり戦略

日時：2014年12月2日(火) 13:30~16:30

場所：追手門学院 大阪城スクエア ホール

内容：第1部 研究報告

第2部 パネルディスカッション

主催：一般財団法人大阪地域振興調査会

株式会社ダン計画研究所

共催：追手門学院大学

後援：大阪府 大阪市 大阪商工会議所

プログラム：

第1部<研究報告>

1) 医療・健康資源からみた上町台地の可能性

2) ワーキング報告

(フォーラムに先立ち実施した3回のワーキングからの問題提起)

第2部<パネルディスカッション>

(第1部で議論された視点を基に上記の各パネラー、研究ワーキングに参加されたコメンテーターやご参集の方々など、多くの方と自由に論談)



開会

開会挨拶：吉野国夫（ダン計画研究所代表・大阪地域振興調査会常務理事）

2014年は株式会社ダン計画研究所の会社設立40周年でした。それを記念して創業の地上町台地をフィールドに自主研究を実施し、医療・健康というテーマで下記のフォーラムを開催しました。関連する行政の方や専門家、企業の方等80余名が参加され、幅広い、しかし奥深い議論が展開されました。共催の（一財）大阪地域振興調査会、追手門学院大学、後援頂いた大阪府市、商工会議所、講演頂いた学識者、会場からのコメント頂いた参加者の皆様にこの場を借りて深くお礼申し上げます。

来賓挨拶：大阪市中央区長 柏木陸照氏

大阪市都市整備局担当部長 梅村宏尚氏

第1部 研究報告

○宮尾展子（ダン計画研究所代表取締役専務）

上町台地の特徴：地域に根付く歴史伝統、文教地区、大型病院と特徴のある病院の集積、住むまちのブランド力が上町台地の特徴。1人当たりの病院、医師、看護師が多く、住宅と病院、デイサービスの距離も近い。ターミナル性の高い集客施設がある。対象地域の人口はおよそ12万人でH12年から10年間で人口が2万5千人増加、65歳以上の高齢者比率もH12とH22でほぼ変わっていない。弊社の立地する谷二界隈でも、ベビーカーをつれたママ達がお茶をしている風景が見られ、かつての官庁街とは異なってきている。住宅地の地価は天王寺区がトップ。大阪都心部の貴重な「住むまち」である。

3回のワーキングの内容：上町台地の強みは地域に根付く歴史やユニークな店等からの刺激があり、多様な選択肢が提示可能な「歩けるまち」。一方で、高齢者の暮らしが大変化し、アウトリーチ医療やマンション訪問型の介護の

場ともなっている。

事業と事例の紹介：先行事例①一般社団法人ヘルスケアイノベーションプロジェクト、②奈良県立医科大学 細井裕司氏の提唱、③大阪大学臨床医工学融合教育研究センターでの中小企業と医師の連携。大学で医学部・医師発の発明が増えていることを紹介。厚生労働省、経済産業省、国土交通省、文部科学省で取り組みが連携し始めているものの、地域で関連する要素をコーディネートする仕組みが見えていないのが現状。

上町台地×医療のキーワード：大きくは次の3点ではないか。①主要駅周辺・都心部のモデルケースとしての取り組み、②フィールドを共有する健康まちづくりと産業創出、③セルフケア関連ビジネスの導入支援。

○高田光雄（京都大学教授・大阪地域振興調査会理事）

大阪の都心居住の意義は、利便性だけでなく、歴史や文

第2部 パネルディスカッション

○吉野（モデレーター）

これまで各分野の専門家の立場から、ピンポイントで意見をいただきました。後半は、パネラー、コメンテータ、参加者の意見をできるだけたくさん聞くという形で進めていきたい。

○会場からのコメント

【大阪府 K氏】

府市医療戦略会議の担当をし、森ノ宮地区で「スマートエイジングシティ」として、健康・医療のまちづくりの展開を検討中。今日の議論では、食べること、歩くことといった日常生活に近いところで、若者や高齢者が参加しながら、小さな取組を組み合わせていくことで可能になると思えた。いま、大病院や中病院でのベッド数の見直しも重要な問題となっているが、近接性に囚われずに、エリアの観点から考えていくことが重要だと思う。

【近畿経済産業局 T氏】

大阪は、どの指標をみても平均値で、平均的な都市。いろいろなフィルターを通して都市を見て、その尖った部分を見出すことが必要。フィルターを変えれば、違う特色が見えるのでよい。まちの尖った試みやプロジェクトを引き出し、その活動のプレイヤーといったマイクロな要素をつなぐような取組が進められればよい。

【中央区役所 S氏】

私は、区役所の保険担当で自身も障害を持っている。行政はベーシックなことを進める役割が基本。今日の話はどちらかというと、ワンランク上の高次な取組のように感じた。行政としても在宅医療に力をいれている。動けない人の「終の棲み家」のイメージもあるが、高齢者だけでなく、交通事故にあえば、だれでも必要になる可能性があることを考えて、自身の問題として考えていくことも重要だ。

【大和ハウス T氏】

当社では、介護施設の建設に早くから取り組んできた。高齢者のうち健常者が8割という実態を踏まえ、シニア向けマンションも検討したが、住む場所というハードより、どのように生きがいをもって暮らすか、どう住み続けていくかについての関心が高い。日常的な事柄から、人との繋がりも含めて、健康の要素になるという話があったが、今、そうしたサービス展開のあり方を検討しており、シニア向けのワークショップを開催しながら、住宅団地の再開発も視野に検討している段階にある。

【長谷工 T氏】

2年前に(株)生活科学運営社がグループ会社になり、多くのシニアハウスの建設運営をしているが、今後は医療サービスのことも展開できないかと考えている。

実際は、学識者の意見は現実の動きに結びつかないところが多く、行政側の制度や、民間企業が動いてペイする仕組みと、うまくつなげていく必要があると感じている。

また、大阪の中心としての上町台地であるが、その周りの色々なものとうまく繋がっていくことができるのも、上町台地ならではの魅力だと思う。

【京阪電鉄 H氏】

15年程前、京阪谷町ビルを担当。当時はオフィス需要を中心に見ていたが、多くの居住者が住む、活力のあるまちだと分かった。病院があり安心感もあるが、ハードだけでなくソフトが整わないと難しい。住民が豊かに暮らしていくことが大切で、その先で、魅力あるまちづくりにつながっていく、という話が印象に残った。

【奈良県立医大 Y氏】

医療を基礎とするまちづくりをテーマに、大和ハウスさんの寄附講座を実施している。先程も紹介があったが、現在、奈良県橿原市で実証実験中である。よく、普遍的なものか、地域的なものかという議論をするが、普遍的な解も必要だが、上町台地ならではの地域性の要素を串刺ししていければ、面白い。

桃坂は早い段階での取組で調査もしたが、課題も多いと聞いている。過去の事例の問題点や課題を整理分析し、その調査結果の蓄積を振り返りつつ、次の展開を考えていきたい。

上町台地というエリアの中だけで完結させる必要はない。ビジネス分野では、他のまちとのコラボレーションも可能。当大学も大阪市立大学をはじめ、和歌山、京都の公立大学とも連携し進めている。

○吉野（モデレーター）

大病院は今井町という有名な伝建地区の傍にあり、県立医大の移転を契機とした、医療と連携したまちづくりを進められており、ユニークな事例になると期待している。

【アーティスト 中前寛文氏】

新しいアート分野に、「ソーシャル・エンゲージド・アート」という動きがある。絵画や、彫刻という鑑賞でなくカナダの例では、高齢者の長期療養施設にアーティストが、サポーターとして3ヶ月間レジデンスする。そこで参加型のアートプロジェクトを進め、高齢者とコラボ作品の発表も行われている。アート活動は、一見するとビジネスやまちづくりと結びつけにくい、アーティストの視点を頭にいれることで新しいことが見えてくるのではないかと。上町台地の病院でも、その内外でアーツ



中前 寛文氏

化へのコンタクト、それが現代の暮らしを充実させる。上町台地の新規住民にもそのようなニーズが確認できるが、地域の資源やコミュニティ活動に接する機会や情報がまだまだ不足している。居住支援の仕組みが必要だ。上町台地に住む子育て世帯や高齢者介護世帯への調査も行った。施設等の利便性に対する評価は高いが、サービスの内容は評価が分かれる。また、地域内に何でも相談できる人的サポートがあることが評価を高めている。さらに、子育てや介護をしながらでも、地域資源と関わり充実した暮らしを実感することが可能であることがわかる。逆に、施設を充実させても地域コミュニティが希薄だと居住の質は上がらない。医療・福祉施設やビジネスを全面に出すのではなく、個人の生活をつなぐ地域の力を重視し、施設は裏方として地域に溶け込むのが健全なまちのありかたではないか。



高田 光雄氏

○長尾謙吉（大阪市立大学教授）

アメリカでは住む所で人の人生が決まると言われている。生きる上で生まれた地理（環境）は宿命である。上町台地は多様な層が混在して居住していることが最大の魅力だ。「死を迎える恐怖とどう関わるか」と言われるが、近年は「死を迎えない恐怖」とも言われる。「寿命が長いのが良いことなのか」を改めて考える大転換がきている。かつては疫病、食料不足などにより大都市は寿命が短いとされていたが、その後は青森県など地方の寿命が短くなってきている。しかし、「健康寿命」の差は絶対的な差となっているのだろうか。医療機関の近接立地が全ての医療問題を解消することができるのだろうか。それよりも、「歩き」や「食などの消費機会」と健康をどう結びつけるかが重要ではないか。上町台地は大きな特性はあるが一つにくだらない多様な面白さがある。市大でも取り組んでいるが、医療まちづくりは文系の視点からも考えることが重要だ。



長尾 謙吉氏

○堀 洋（大阪市立大学健康科学イノベーションセンター副所長）

平均寿命と健康寿命に10年程度のギャップがある。65歳未満の医療費と65歳以上の医療費では4倍。国民の「健康寿命」の延伸が国家命題である。病気にならない医学・予防医学が重要。今までは、治療・診断・医療だけで良いとされていたが未病、予後・介護、健康増進・維持が重要という考えが近年の傾向。あべのハルカスに健診の機会増加を担うMed



堀 洋氏

City 21（先端予防医療部附属クリニック）がオープン。うめきたの健康科学イノベーションセンターでは疲労研究を中心に健康増進を担う。健康は疑われる科学なのでエビデンスを持った研究開発の展開を進めている。上町台地近隣地区としての連携、また、施設に行くのが大変という利用者の声に、現在ICT活用も視野に入れた地域展開の方向を探っている。

○三浦 研（大阪市立大学准教授）

行政は主にハコモノを誘導してきたが特養は42万人入所待ち。すまい側に介護力をつけていく時代になっている。24時間定期巡回型訪問への取り組みがあるが職員確保と採算が課題である。サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）が15万戸できているが、上町台地は地価が高いためサ高住があまりつくられていない。民間の力が必要である。先進事例として、東広島の就労移行业（カフェ）がある。下駄履きのマンション、アパートであれば、コストをかけずにサ高住と同等の機能を持つ事が出来る。上町台地はこうした新しい試みをするのに適しているのではないか。



三浦 研氏

○コメンテータ（ワーキング参加者）

【NPO 法人まち・すまいづくり 理事長 竹村伍郎氏】

少子高齢化と言われているが、上町台地の子育て世帯は3、4人が普通。電動アシスト付の3人乗り自転車に並走して子供用自転車走っているが、自転車環境が整っておらず危ないと感じる。サ高住は補助金の最低基準（18㎡程度）の狭小な部屋が多いのでいかがなものか。上町台地はゆりかごから墓場までと謳っているがホスピスは2カ所死ね場所がない。スーパーができたが独居の方は個人用の量が良らしく、コンビニが繁盛している。こうした利用者のニーズに対応できていない商店街は衰退してきており、新たな方向転換が求められている。

【株式会社近鉄百貨店 商業開発本部 店舗リーシング部 統括部長 米田昭子氏】

近鉄百貨店は上町台地に2つ百貨店を持っており、私自身も上本町に住んでいる。新しい方が流入してきている上町台地では人のつながりをどのようにつくっていくかが課題であり、色んな世代が行ける商業施設が意義を持っていると思う。フィットネスや若い人向けの店舗でも百貨店に出店すれば50-60歳代が楽しんでいる風景が見られる。上本町店はターミナル立地ではあるが居住地をベースとした百貨店でもあり、今後は医療健康面やコミュニティでの人のつながりといった取組を企画していきたい。

トの視点を取り入れたプロジェクトの可能性があると考
えている。

○吉野（モデレーター）

現場の様々な生の声を聞く事が出来たが、時間が大幅
に押ししてしまった。最後に、パネラーの皆様がこの1点と思
えるご意見を一言ずついただきたい。今度は三浦先生か
ら。

○三浦研氏

上町台地の食べる、歩くといった魅力は、非常に重要。
介護が必要な期間は僅かで、元気な高齢者の暮らしの質を
どう高めていくかを考えることが重要。安心した食事を通
して、人がつながり、見守りができるような仕組みができ
ればよい。おせっかいなおじさん、おばさんがいて、そう
した人たちをサポートすることができればよい。また、障
害者就労支援系の仕組みと組み合わせることで、高齢者と
他世代の交流も可能。資金確保にも有効で、お金が無い中
で地域戦略を考えていく知恵の一つだと思う。

○堀 洋氏

先ほど、芸術の話もあったが、健康の捉え方が人によっ
て異なるため、健康まちづくりを考える際、健康の定義も
必要になってくる。われわれの関連グループでは、エビデ
ンス・ベースの健康を対象とし、疲労研究では、疲れない
絵、写真や風景などの研究も行っている。「歩けば元気な
なる道である」といったことを科学的根拠で証明しつつ、
その仕組みを創ることも考えられる。科学だけでなく文化
等とも折り合いをつけながら考える。その時、定量的でな
いところをどう測って客観化・可視化していくかも考えな
ければならない。

○長尾謙吉氏

多世代の人びとが動いていることが健康なまちだと思
う。アメリカのサン・シティのような町は健康であるとは
言いがたい。人口構成からも上町台地はそのポテンシャル
を有する。また、アメリカのバイオ産業が強いのは、貧困
者が被験者になっているからという指摘もある。そう考え
ると、住むまちづくりと、バイオ・医療の発展戦略の関係
は、簡単ではない。

消費者の声、特に生の声をいかす活動の場所に、上町台
地がなればよいと思う。

○高田光雄氏

長尾先生から「死を迎えない恐怖」という話があった
が、恐怖ではなく充実した暮らしを実感するためには住ま
い手が受け身でないことが重要。環境が人にどれだけサー
ビスを提供してくれるかという「住み心地」だけではなく、
人と環境がどれだけ応答できるかという「住みごたえ」
が、住まいやまちには問われている。上町台地で「歩
く、食べる」ことは、住まい手が環境に積極的に関わって
いく行動として評価できる。

「施設の住宅化」だけでなく、「住宅の施設化」も進ん
でいる。屋内の温度を極端に均質化したヒートショックが
ない環境は、外出機会を減らすので好ましくない。日本の
家では、内と外をつなぐ縁側、玄関土間等の中間的な領域
が重要で、それらの空間を通じて家とまちがつながる。ま
ちとつながることが住みごたえを高め、健康の増進に寄与
する可能性があることを忘れてはならない。施設には特定
目的達成のための効率性が求められる。家やまちは施設で
はない。住まい手がまちに関わりやすい取組を推進してい
くべきだと思う。

○宮尾展子氏

これまで関わった業務で、起業家・ベンチャー、知財・
発明家に話しを聞いてきたが、イノベーションのモチベー
ションには、大きく3つある。「強烈なミッション」、
「社会の体制に対する怒り」、「楽しい」。先ほど、ベー
シックな部分とワンランク上という話があったが、ベー
シックなところは社会的なミッションに基づいており、そ
こに上町台地の食事の楽しみなどの要素を載せていき、楽
しみをモチベーションに高めていくものではないか。

○吉野（モデレーター）

ここで取りまとめをする予定でしたが、最後の先生方
のご発言がこのテーマの多様な課題を示しており、「歩くま
ち、施設とまちと住まいの関係性」など良いキーワードも
出たと思います。皆さま、本当にありがとうございます
ました。パネラーの皆さんに盛大な拍手をいただいて、本会
を締めたいと思います。（拍手）

閉会

閉会挨拶：石原武政氏（大阪地域振興調査会会長・大阪市立大学名誉教授・流通科学大学特別教授）



われわれのような世代になると、健康は深刻な問題。地域住民に万歩計を配って、ポイント
カードに加算する取組をしている商店街もある。一つご紹介したいのは、高松市丸亀町の再開
発。B街区での1階は商店であるが、2階に医療モールを設け、東京の大病院を定年退職する
医師を招いた。そこでは、上に積まれた住宅の住民への往診が条件。こうした成功例もある。

今回のフォーラムから実験が始まって、上町台地にとどまらず、より広い地域に向けて、い
ろいろなモデルを発展させていってほしい。最後まで、ご参加いただいた皆さま、ありがとう
ございました。

以上

平成 27 年 1 月 28 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

梅山 晃佑

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

からほりむすび食堂プロジェクト

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	
8月	
9月	
10月	空堀むすび食堂①（10/4） 高津宮アートギャザリング（10/19）
11月	マチオモイ帖作成
12月	からほりごはん（12/6） 空堀むすび食堂②（12/6）

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	<p>【総括】</p> <ul style="list-style-type: none">●イベント参加<ul style="list-style-type: none">・「空堀むすび食堂」へ2回合計約100名が参加・「からほりごはん」へ5名が参加●スタッフ・出展などでの参加<ul style="list-style-type: none">・「からほりごはん」へ2名がスタッフとして参加・「高津宮アートギャザリング」へ地元住民が2名が作品出展、2名が運営スタッフとして参加・「マチオモイ帖」の制作へ7名が参加●その他<ul style="list-style-type: none">・1名（30代女性）が空堀へ移住・地元情報誌に記事が掲載・3名のグループが、からほり軒先フリーマーケットへ出店
-----	---

■空堀むすび食堂

当初の予定どおり、2回実施しました。それぞれ約50名ずつの参加があり、近所の方から遠方の方、子供からおじいちゃんまで、昔から住んでいる方から最近引っ越してきた方、告知を見て来てくれた方から通りすがりの方、東京から遊びに来ててたまたま通りがかった方まで、雑多な方々に入れ替わり立ち替わりで集まっていただきました。当日はこの空堀界隈のイベント情報やボランティアスタッフ募集の情報の提供や、商店街のお店情報などを交換したり、初めてそこで出会った人同士でしゃべってもらったりしたことで、この空堀むすび食堂でたくさんの縁をつくることができました。

また、ここで出た話題として、「地域メディアを作りたい」「マチオモイ帖を作るだけでなく、それを使ったイベントをしたい」「空堀限定のギネスブックを作ってみたい」「屋台を始めたい」など、妄想だけではなく具体的なアイデアがいくつも生まれました。今回のプロジェクトの中枢となる企画でしたが、実際にここから企画への繋がりも生まれ、また今後への展開の可能性も生まれたのは集客の数以上に大きな成果であると考えます。

■からほりごはん

からほりごはんは、「空堀界隈の美味しいものを知ってもらう」ことだけでなく「商店街で買い物をする楽しさを体験してもらう」ことを目的に開催しました。ここへはスタッフとして空堀に住む2名が参加、参加者として1名が参加しました。商店街を散策しながら、今回のテーマである「鍋」の食材について考えてもらった後、解散して各自食材探しをしてもらいました。定番の肉や魚介、野菜類の他に「乾物」「ソースなしのご焼き」など普段お鍋では買わないような食材も集まり、おいしいけれど再現不可能な鍋が完成しました。参加者とスタッフが親戚の集まりのような雰囲気、鍋をつつく姿がとても印象的で、とても距離の近い形で空堀のことを体感してもらえたと感じます。

■高津宮アートギャザリング

地元の神社「高津宮」で開催された「たかきや秋祭り」内で開催される「高津宮アートギャザリング」というアートイベントへ、空堀に住む2名が作品の展示という形で参加しました。また、それだけでなく、また別の空堀に住む2名が運営スタッフとして参加しました。1名は地域密着のコンセプトで作品を作りました。地元の方へのヒアリングやまちあるきから得たインスピレーションを元に作品を作ることを通じて、地域の方との関わりも生まれました。また、運営スタッフも企画展として「神社」ということをテーマに参加者とコミュニケーションを取るような作品を制作して出店することへと繋がりました。

■マチオモイ帖

3月に Mebic 扇町で毎年冬に開催されている「わたしのマチオモイ帖」に向けて、「からほり帖」を7名のメンバーで何度もミーティングを重ねて制作しました。「空堀を紹介する冊子」は既にたくさんあることから、この冊子をツールとして地域の方と関わったり、空堀のことを発信できるようなものにしよう、というコンセプトのもと、4つの質問を埋めてもらうようなノートとして「からほり帖」が完成しました。今後はこれをツールにしたイベントなどを2～4月にかけて実施しよう、という動きがさらに冊子の制作を通じて生まれました。

今後の 展 望	<p>今回の「空堀むすび食堂」というプラットフォームを作ること、まちの様々な活動への誘導をすることができました。一時的なコミットであるイベントへの参加はもちろん、長期でのコミットとなるスタッフとしての参加や作品の出展、または移住してきた、という方もありました。</p> <p>そして、今後の展望としてもいくつかの「こういうことをしたい」という動きが実際にいくつか生まれているので、それをご紹介したいと思います。</p>
	<p>①マチオモイ帖を活用したイベントの開催</p> <p>上記でも述べましたが、今回制作した「からほり帖」が作って終わりというのではなく、この冊子をツールとして地域の方と関わったり、空堀のことを発信できるようなものにしよう、というコンセプトで制作されました。すでに具体的に2月の後半に、まちあるきをしながらこの「からほり帖」をそれぞれ書きこむ、というイベントを実施する方向で調整をしています。また、この「からほり帖」は3月に開催される「わたしのマチオモイ帖」にて展示されるのと、4月に開催される「まちライブラリー OSAKA BOOK FESTA」にも企画として参加を予定しています。</p>
	<p>②地域メディアの立ち上げ</p> <p>空堀むすび食堂に参加してくれたライターの方が、「地域メディアを作りたい」という話を持ち込まれました。そこで色々な人に話していると「やってみたい」という声も多く、またその中にはWebデザイナーや広告関係者も数名おり、これから実現へと向けて動き出そうとしています。</p>
	<p>③外国人の誘致</p> <p>空堀むすび食堂に参加してくれた方で、英語講師をされている方が、海外の人に空堀の魅力を伝えたいということで相談にいられました。その後色々話しこむ中で、Airbnbなどを活用して外国人が泊まれるような場所を探したいということで、現在空堀で物件探しに入っており、見つけ次第具体的な動きになっていきそうです。</p>

5 事業の総参加人数

のべ 約118 名

(内訳：地区内から参加 ？ 名・地区外から参加 ？ 名・不明 ？ 名)

(地区内で関わった実人数は、 22 名 *把握できている範囲で)

●イベント参加

・「空堀むすび食堂」へ合計100名が参加

・「からほりごはん」へ5名が参加

●スタッフ・出展などでの参加

・「からほりごはん」へ2名がスタッフとして参加

・「高津宮アートギャザリング」へ地元住民が2名が作品出展、2名が運営スタッフとして参加

・「マチオモイ帖」の制作へ7名が参加

その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。

(例：30代から40代が6割程度、など)

上記の22名のうち、20代が4名、30代が16名、40代が2名

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 26 年 1 月 30 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

應典院寺町倶楽部

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

多世代を結ぶく表現の学び舎>デザイン・プロジェクト 2014~異日常の視点から~

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	「キッズ・ミート・アート 2014①」のプログラムの実施・コモンズフェスタ企画委員会開催
8月	「キッズ・ミート・アート 2014」の振り返りと、「キッズ・ミート・アート 2014②」の企画・広報。12月「コモンズフェスタ」「キッズ・ミート・アート 2014②」の企画と広報打ち合わせ
9月	「コモンズフェスタ」企画内容に関する企画委員会開催
10月	「キッズ・ミート・アート 2014②」の企画と広報、12月「コモンズフェスタ」の企画と広報ツール開発（fb・HP・チラシ）、広報・周知
11月	「キッズ・ミート・アート 2014②」実施と「コモンズフェスタ」等の広報・周知、コモンズフェスタ企画委員会開催
12月	コモンズフェスタ内「キッズ・ミート・アート 2014③」実施 「異日常」をつくる「コモンズフェスタ」多世代交流の場「自分感謝祭」の実施

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	2014年度のキッズ・ミート・アートでは150名を超える親子の来場があり、クラフトワークショップや演劇ワークショップ、また、ライブペインティングなどのプログラムを多様に行うことで、「異日常」性を持つ多くの多彩なアーティストたちとの交流や体験型のワークショップが開催できました。表現の学び舎というタイトル通り、様々な表現の手段を異なる視点から体験できる創造的な場を上町台地に提供できたと思います。
-----	---

今後の 展 望	<p>2013年度に行いました同プログラムは、8月30日・31日に大きなイベントとして開催したため、たくさんの方の来場があったものの、個人をつながりや子どもたちそれぞれの自己表現から自己肯定の場面への関係性を持つことが難しく、今回はそれらの反省より、少ない人数でしっかりとした関係性づくりが可能なワークショップを4回、交流の場を数回持つなどの工夫しました。今後もきめ細やかなプログラムづくりをしていきたいです。</p>
------------	---

5 事業の総参加人数

<p>..... 200</p> <p>(内訳：地区内から参加 100 名・地区外から参加 100 名・不明名)</p>
<p>その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。 (例：30代から40代が6割程度、など)</p> <p>就園前の子どもと30代40代の親がほとんどでした。</p>

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。